

サラワク東部の焼畑民イバンによる植物利用および認識の植生間比較

百瀬邦泰 (愛媛大学農学部)・加賀道・小泉都 (京都大学アジア・アフリカ地域研)

マレーシア・サラワク州東部のイバン族の村の周囲で、原生的な植生と、さまざまなやり方で人為的に改変された植生 (以下、二次林とよぶ) にプロットを設営し、植生調査を行った。また、各プロットにみられた植物の名称と利用法の聞き取りを行った。

原生的な植生「カンポン」は、典型的な低地丘陵混交フタバガキ林であり、ランビル国立公園の中にプロットが設営された。二次林としては、以下の 5 種類の植生を村人が認識しているのでそれに従ってプロットを設営した。すなわち、(1) 用材確保のためや墓場林その他の精神的な場として、小面積が孤立して残されている残存林「プラウ」、(2) 焼畑直後の休閑草地「ジェラミ」、(3) 焼畑後約 5 年目で次の伐開が可能な休閑林「トゥムダ」、(4) かつて焼畑を行ったが比較的長期間放置されている土地「バゲラン」、(5) ゴムが植えられたがあまり手入れがされていない「クブン」の 5 種類である。

植生間で植物の名称と利用法を比較したところ、興味深いパターンが見出された。原生林の植物は、科または属のレベルに対応する名称がつけられている。ごく認識しやすい特徴的な種についてのみ、形容詞が付加されて種レベルで認識される。なお、狩猟採集民のプナンに比べ、用いられる語句は、人体、身近な動物、栽培植物などが多く、形態や生息地を直接表現する形容語句が少ないという特色が見られた。利用については、約 5 年に一度程度の一斉開花時には、果実や動物を探すために頻繁に訪れるが、普段はあまり利用しない。但し数十年に一度のロングハウスの建築では、資材の多くを原生林に依存する。アントゥ (お化け) が多く住み、その多くは非常に怖い、中には特別な呪力を授けてくれるものがある。

二次林の植物では、種レベルで一次名称 (ジェネリック) がつけられており、形容詞を付加して下位分類する必要はない。日常的に利用しており、作業小屋の建築やロングハウスの日常的修繕に用いる木材、道具の素材、薪、野菜、薬品等が採集されるし、狩猟も一斉開花時以外は二次林で行われる。アントゥが多く住み、その中には墓場林に埋葬された死者が含まれる。村で毎年営まれる祭礼において、もてなしの対象となるのは、こうした二次林に住むアントゥ達である。

二次林は日常的に利用し、身近なものであるのに対し、原生林は怖くて近づきたいが、時として大きな恵みをもたらしてくれる。また、原生林の植物に注目すると、狩猟採集民のプナンが、システムティックで直喩的な形容法で多くの植物を命名しているのに比べ、イバンは、身近なもので象徴することによって植物を命名している。